
沈むゼリー

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沈むゼリー

【Zコード】

N1124M

【作者名】

きみよし敷太

【あらすじ】

好きになった彼女には恋人がいる。

だから僕を幻滅させて欲しい。この恋心が嘘になるよう。この息苦しさはゼリーのプールにでも沈んでいいよつだ。息苦しいのに甘い。ふるふると、絡んで沈む。

触りたい。

君に。

指先でボディラインをなぞり、体温の輪郭を心に刻みたい。手で触れて、存在を確かめたい。

触れたい。触れて、触れて、触れて、抱きしめたい。

水色のゼリーの中で溺れるようだ。ゆるゆると、ふるふると。もがく手に、絡みつく。口に、鼻に、耳に。流れ込んで、窒息させようとする。息苦しさは甘い。もがくほどに沈む。溺れる。ゼリーのプールで、太陽の光はどう射し込むのだろう。屈折して真っ直ぐに届かない、弱められた明かりの中で、僕は揺れる。

触れたい。

君に。

溺れる。

君に。

僕を絶望させてください、と言つたら笑われた。鼻で。なにそれマゾとかそういう趣味の人なの、と。甘い声。彼女の声は鈴のようで、空氣を甘く揺らす。

「幻滅させてください、これ以上好きにならなくてすむよ！」

「ちょっとこの酔っ払い、どうにかして」

サークルの飲み会はテニスの練習のあとだった。九時に終る通常を一時間切り上げて、女の子達はシャワーを浴びに先に帰った。さつきまでジャージ姿で汗をかいていた彼女達は、石鹼の匂いをさせたぴかぴかの肌で、短いスカートから勿体無くも美しい脚を晒している。だけど彼女はもっと特別。透き通る白い肌の、頬だけほんのりとピンク色をしていて、細い手首に水銀色のリングをいくつかはめていて、それがしゃらりと静かに音を立てる。

くすくす、と笑うさえずりのよつなざわめき。

七月の梅雨が空け切らない湿気の多い夜に、ジョッキのビールがたくさんと、色とりどりのカクテルとが並ぶ。

「酔うにはまだ早いしょ、まだジョッキも空いてないのに」からかいの声が飛ぶ。いつもの僕なら笑いはじめている。誤魔化すために。だけど生ぬるいこの夜に、僕は彼女を真っ直ぐ見つめることができない。女の子が四人と男が五人。彼女に恋人がいることは知っている。七歳年上の大人。会社員で営業マンで、車の関係だという。不況時に大変、だけどこの前誕生石の指輪を買ってもらった。そんな、話を耳にして、そして覚えていく。女らしいのかもしないと、自分に苦笑しながらも。

僕の戯言はすぐに流され、みんな来週の試合の話に移る。だけどそれもすぐに消えて、新しく出たゲームの話になつて、ついていけない女の子達が文句の声を上げた。そして、生まれ変わったら人間以外のなになりたいか、なんて話になる。脈絡のなさは酒の偉大な力。

「絶対猫、猫になつて一日中ずっと寝てたい」

「ライオンとかかな、なんか生きてる獲物を食い殺してみるとかってちょっと楽しそうで」

「やだ、肉食過ぎる」

「絶対こいつサディスト」

「気に入った女とか、好きすぎて食べちゃいましたつていうのはこういうタイプなんかね」

「あー、小さく切つて冷凍庫で保存してたりしてな」

「でも乳房つて脂肪ばつかで美味しくないんだってね。脂身つてことでしょ」

「美味しいのってどி? 尻とか? 太ももとか? 肋骨とかのスペアリブ?」

「基本的によく動くところって美味しいらしいよ、頬とか」

なんて話をしているの、と女の子の悲鳴に似た非難が飛んで、男達

が笑う。食つちゃうぞ、とひとつが低い声で言つて、あやあきやあと黄色い笑い声が響いた。

僕だつたら。

空気になりたい。

綺麗な空氣。

君に吸い込まれて、君の肺を綺麗に満たしたい。

だけど言わない。そんなことを言つたら、ただの変態みたいだし、きっと誰にも理解してもらえないだろうから。

もしかしてわたしのこと好き、と彼女が微笑む。疑問系はやわらかい。

トイレから出たらそこに彼女がいた。ふたりきりになりたくてこつそり続いてトイレに立つというテクニックは古典的に使用されているらしいけれど、この場合の彼女はただ単なる生理現象だらつ。

「うん」

「わたし、彼氏いるよ」

「知ってる」

「あなたつて、」

テニスしてるときは結構格好良く見えるのにね、と言われる。褒められてるのかけなされているのか分からない。店の奥にあるトイレは間接照明で、男女の最初の扉は一緒にけれどその向こうに分かれて入る扉がまたひとつある。

「彼氏もいる女の、どこが好きなわけ？」

どこだらう。バンビのようなくりくりした目が僕を見ている。悪戯っぽい光が宿る。後づけの理由なんて搜せばいくらでも出てくるだろうけれど、もう今では分からない。存在が僕の胸いっぱいに膨らんでいる。息苦しくて、溺れそうで。

「……強い女の振りして、本当は傷つきやすいことない?」

「そんなふうに見えてるの?」

「もうよく分からぬ、好きって気持ちだけがある」

「錯覚かもしれないよ」

「錯覚であつて欲しい」

自己完結の恋になるよ、と彼女が笑う。薄ピンクのハンカチを取り出そうとして、小さなバックから封の切られていない煙草が落ちた。腰をかがめて拾う。渡す。ありがと、とゆるゆる持ち上がる唇を眺めつつ、吸うの、と聞いてみる。

「わたしは、吸わない」

わたし、は。

じゃあ恋人の為に持ち歩いているのだろうか。それとも、少しでも恋人と同じものが持ちたくて、そんな可愛らしいことをしているのだろうか。どちらにせよ、胸が痛い。その好意が自分に向けられたものではない、ということではなくて、そんな可愛らしいことを彼女にさせているのが、彼女の恋人の存在だということだ。

「今なら氣のせいだつた、で済むかもしないから、思い切り幻滅させるようなこと言つてよ」

「氣のせいつて、わたしを好きつて氣持ち?」

頷いたら、いやよ、と言われた。

「いや?」

「せつかく好かれてるのに、どうして嫌いになつてもらわないといけないのよ」

「僕が好きつていうのは困らないの?」

「彼氏がいるからあなたとは付き合わないけど。でも好かれてるのつて嬉しいこと、だと思う」「

ストーカーとかにならなければ、と笑つて、それは図々しいか、と小さくつけたした。

「それに、わたしに幻滅させられるよりわたしに嫌われる方が乐じやない? 嫌なこといつぱい言つたりしたりすればいいんだし。顔も見たくないって言われるくらいにいろいろするとか」

「嫌われたくないんだよ、複雑な男心として」

「贅沢だね」

「複雑なだけだよ」

ふうん、と考えるような顔になつたあとで、彼女は僕を見てぱちぱちとまばたきをした。皿のトマトにまづぱづこつて、と言われる。

「え、ビー、」

「取つてあげるから、じつちかがんで」

僕と彼女では二十センチくらいの身長差がある。素直にかがんで、彼女に顔を近づけた。シャンプーなのか香水なのか、清潔な匂いがする。女の子つていい匂い、と思つていると、取るから皿を開じてよ、と言られた。

言われた通りにして。

彼女の鼻つて小さくてすんなりとしていて形が好みだ、とまぶたの裏に思い描いていたら。

唇にやわらかな衝撃があつた。

「な……っ、」

ぶつかつたのは彼女の、赤い唇。

「彼氏がいてもこうこうことしちゃう女なら、幻滅してもうらえる?」

「……できれば不意打ちじゃなくともう一回ちゃんと、と思つてしまつ」

アルコールの匂いが微かにする。それを打ち消す彼女の匂いがすぐには重なる。

バカじゃないの、と彼女は転がる鈴のような笑い声を上げて、トイレ行くから、とスカートをひるがえし扉の奥にひらりと消えた。

唇を思わず指で触れて。

僕はどうしていいのか混乱してフリーズする。

溺れる。ゼリーのプールは恋心そのもので、ゆるゆると沈む。息苦しくて甘い、もがいても逃げられない、諦めてたゆたつても動けない今まで。

僕が魚だったら泳げただろうか、するりと身を交わして。触りたい、君に。

触れて確かめたい、その存在を。

指でなぞつて、輪郭を刻みたい。

触りたい。触りたい。触りたい。触りたい。触りたい。

触れたい。触れたい。触れたい。触れたい。触れたい。

胸を締め付けられて息苦しい。恋は甘いだけのものだと、キャン

ディそのものと信じて疑わない子供ではないのだけれど、こんなに

苦しいのは辛い。生きているという感じがしすぎてします。

恋をしている。

君に。

気がついたら溺れている。

溺れる前に回避しようとも、そんなのは無理な話
なのだ。

「……待つてたの？」

ずっと固まつたままでいたので、トイレから出でてきた彼女を驚かせてしまった。違う、の意味で首を横に振る。なんだか泣きそうになる。

「……ごめんなさい、わたし酔っ払つてることをいいこと、結構ひどいことしたよね」

「ひどいこと？」

「彼氏と別れる気もないのに、キス、したりしたこと

期待させるだけって一番ひどいことだよね、と傷ついた顔をする。するい、と思えれば僕は救われるだろうけれど、沈むだけだ。更に。光の射さない深海へ。

そうだ、僕は生まれ変わるなら深海魚になろう。

深くへ潜つて沈んで、触れたいと願つてしまつための指を持たないよ。

抱きしめたいと望んでもしまつ腕を持たないよ。

「でも幻滅されるのは嫌なんだ、本当に」

「……好かれたい？」

「女だもん。我儘でごめんね。好きになってくれてありがとう」「真っ直ぐに君の声が届く、視線が絡む、胸が甘い痛みに浸される。侵食。呻きたくなるくらい、君が好きだと思う。先のないありがとうが、僕を苦笑させる。

君は、何色のゼリーに溺れているのだらう。できればそれだけでも、知りたいと思つてしまふ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1124m/>

沈むゼリー

2010年10月8日14時36分発行